

「」の世は舞台、すべての男女は役者である、とは劇作家ウィリアム・シェイクスピアのごとくだが、現実の自分をふりかえってみれば、せめてリハーサルさせてくださいませ、と天に向かって懇願せざるにられないようなオロオロした大根役者ぶり。

だからいっそう、この人との出会いは、新鮮であった。
小野剛さん。靴の修理職人である。

東京・恵比寿の住宅街の一角にほわっと現れる、隠れ家のような靴屋。ガラス越しに見えるのは、靴を修理する小野さんである。工具をあつかう器用な手元、精悍な横顔、鍛えられた筋肉をうかがわせる立ち姿には、つい足を止めて見入りたくなる味わいがある。

「舞台裏」で仕事をするのがあたりまえだった靴修理職人を、こうして「表舞台」でパフォーマンスさせているプロデューサーは、「リファール」の社長、金本仁志さん。靴の海外品買い付けをしていた時代に、取引先の百貨店で、靴の修理の仕事をしていた小野さんとの出会った。

技術の高さはもとより、修理の方法が独創的だったこと、そして何より修理の内容をことばで表現する技術がすばりしかったことで小野さんにほれこみ、「こんな職人

技をもつ人をスターにしたい」と思って、職人の仕事ぶりを「ことよく見せる」舞台をつくった。

「職人さんが手打ちでそばを作っているところを見ると、食べたくありませんよね？」靴だって、同じです。職人さんが修理しているところを見ると、自分の靴も修理してもらいたくなってきませんか？」たしかに、今までそんな発想の店がなかったのが不思議なくらい。

実際、修理ブースに持ち込まれている、損傷の激しい靴の数々を見ると、捨てようかどうか迷っている自分の靴もどうにかできるのだろうか？と聞いてみたくなる。「もちろん、どんな靴だって修理できます。靴には、はいている人の愛着と時間がこめられていますから、簡単には捨てられない。ここに持ち込まれるまでの時間と、修理したあとの時間をつなぐのがわたしの仕事です」と小野さん。

「こやかに聞いていた金本社長は、こう付け加える。「あきらめていたものが直ったとき、お客様はまず、無言になるんですよ。感動のあまり、ことばが出ない。しばらく眺めて、すごい、とつぶやいて、そしてやみつきになって、またいらっしゃいます」

そんなスゴ腕の職人も、かつては仙台で演劇俳優を目指していた。副業だった修理の奥深さに目覚め、

技術の向上をめざして東京に。「新幹線のなかで、靴を一足、ぜんぶバフしてみたりした」という熱心な研究ぶり、たちまち東京でも注目の技術者になる。

「靴の修理も芝居と同じ。一見、わからないところに隠し味を込めるんです。はいてみてへあっ、ちがうーん」とお客様に感じてもらうと、へ勝った！と嬉しくなります」
具体的に、どういう隠し味でしょうか？

「たとえば、この中敷きです。表面はふつの中敷きに見えますが、裏側は持ち手の足の形に合わせて立体的に作ってあります。だから土踏ます部分などが、びたーっとくるんですね」

そう誇らしげに語る小野さんの足元は、なんとビーチサンダルで、これが足の凸凹にぴたっと合うよう、立体的に成形しなおしてあるのだ！

お客様との最初の会話から、お会計が終わるまで、修理職人としてのパフォーマンスを心がけている、という小野さんに心底感心して「このお仕事は、天職ですね」とつぶやくと、小野さんは、うんと首をかしげた。

「私ができるサービスをして、報酬をもらい、多くの人に喜んでくれている……という意味では、今の仕事に充実感があります。で

Who's who ⑩

シューズリペア

小野剛 42歳



も、天職と満足して可能性をわざわざ小さくする必要はないと思っています。別の未来がここから開けてくるかもしれないです」

ああっ、失礼しました！ 恥じ入る中野に、小野さん、ことばをつづける。

「今はこれが私の舞台です。でも、どんな仕事にだって、戦場と舞台は、必ずあります。そのとき、そのときに、舞台をめいっばい楽しめるかどうか。それがだいじなんじゃないでしょうか」

舞台を、楽しむ。靴を修理してもらうより先に、大根役者根性を修理してもらったような気がしています。■

中野香織 一文
text:Kaori Nakano
福知彰子 写真
photographer: Aiko Fukuchi

リファール
〒150-0022
東京都渋谷区恵比寿南2-7-1 1F
Tel: 03-5768-1373
www.rifare.jp

